

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

リ 5

1476

6

武家
必覽
續之泰平年表

六

高瀬文庫



This image shows a red ink impression of a square seal. The seal contains several characters in a stylized, archaic script. A prominent character on the left side is a large, circular, swirling form. To its right are two vertical columns of characters. The bottom row of the seal features three distinct characters. In the bottom right corner of the seal area, there is a small, dark, circular mark or hole. Below the main seal, there are two small, dark, stylized figures standing on a horizontal line, possibly representing the artist or scribe.

同士多有時於竹林中作大講說
沙門者中以迦葉爲最尊而爲之說
亦多以爲是也。地主者或謂之爲
南華子也。後有慧能者曰。汝等
聞吾說法。須向心領。勿以口傳。
吾無爲也。不以爲有。不以爲無。不
以爲生。不以爲滅。不以爲來。不以爲



卷之三

同上

事多争一地多聚少争者而主也
不争他物而主事多争者多也大有天日主明故
令有争者而主之勿争而从之则日进上善其一
心以自是自非也勿争而从之则日进上善其二
事以自是自非也勿争而从之则日进上善其三
人以自是自非也勿争而从之则日进上善其四
事以自是自非也勿争而从之则日进上善其五
人以自是自非也勿争而从之则日进上善其六
事以自是自非也勿争而从之则日进上善其七
人以自是自非也勿争而从之则日进上善其八
事以自是自非也勿争而从之则日进上善其九
人以自是自非也勿争而从之则日进上善其十

同上四月八日
丁巳年

問
至
了
也

本山 乃多糸山 伊多詔幸 伊豫半舟 以作人也
御武乃賀馬の子也也 ある少城が 佐野宮也
是也 本國也 伊多詔幸 伊豫半舟 以作人也
伊多詔幸 伊豫半舟 以作人也

印光堂印

王羲之書

卷之三

古事記傳抄本
吉川家文書

御事は力の弱い者に於ける事多し。又其事は成程修爲す
不相能事。子人も亦多々有る也。○若臣既至。是少切
事。凡て如次。云々

卷之四

此處有事務但以不歸爲紅言上之于亦可也

萬葉集

日暮安否倒也快了。只是此一宿店中倒
一宿大抵是不以也。晚归。归宿。乃过移地
则更无此。其夜归。第数里。高丽门。始得一
少客。山腹中也。因投宿。于是以百金。大意未
以为意。既晚。宿中移。下榻。有客。亦知其
多。乃有「苦痛」。多。皆。而。之。而。之。
「大痛」。如。苦。痛。都。可。以。多。苦。而。之。
思。痛。而。移。或。为。之。不。能。移。中。移。之。大。竟。已。
多。苦。而。移。可。以。多。苦。而。之。
堵。至。大。一。仰。那。石。也。移。多。木。那。那。
之。多。石。之。那。那。那。那。

善子達度多事也も松内少耳多事也以
万弓角外也勿御御門家即山あて多煙火
「前川大内多也山也松内御門家
御多也近「多事也也山也多也山也
御門也山也山也山也山也山也山也
「大内御門御門可期孔井大内御門也山也
多也山也山也山也山也山也山也山也
「大内御門御門可期孔井大内御門也山也
多也山也山也山也山也山也山也山也

了 拙多島と原宮年 神事等諸事類
平日事多々小窓の事あり候も一ノ事記元
治元年一月九日嘗て御内閣より御
詔勅の送附す候。又くそ詔書は年を定め未承
十六年正月廿二日御内閣より御詔書
十六年正月廿二日御内閣より御詔書
水浦ま公門との御連絡を移行ゆけりて
隔々にて改めて之の移事の内緒候と云ひ然處
り今主事と云す。御内閣より御詔書にて又くそ
詔勅の送附す。御内閣より御詔書にて又くそ
詔勅の送附す。御内閣より御詔書にて又くそ
詔勅の送附す。御内閣より御詔書にて又くそ
詔勅の送附す。御内閣より御詔書にて又くそ

甲子年正月廿二日御内閣より御詔書にて又くそ
戸主事と御内閣より御詔書にて又くそ
風雲の御詔書にて又くそ
丙子年正月廿二日御内閣より御詔書にて又くそ
大藏省御詔書にて又くそ
算體二月廿二日御内閣より御詔書にて又くそ
山岳の御詔書にて又くそ
庚午年正月廿二日御内閣より御詔書にて又くそ
地主事と御内閣より御詔書にて又くそ
年正月廿二日御内閣より御詔書にて又くそ

西宮山体清外提摩子乃大迦葉身。雖
聲聞弟子也。阿難入處。乞食。不取
取。乞食。又因事多。大迦葉。被觸。漸
退。勝出中。亦無所取。是故。以。而
舍迦葉。并。以。是大迦葉。才死。是年。也。舊
之。經傳。九方朔。是年。百。而。年。日。不
滿。大。多。以。以。而。自。之。大。之。一。是。而。
大。經。之。行。之。淨。大。多。八。能。多。則
說。大。多。多。也。大。多。多。而。大。多。而。
多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
大。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。

○是年。大。多。多。多。多。多。多。多。多。
多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
大。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
大。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。

不

同。多。四。向。

山。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。
多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。

大。多。多。多。多。多。多。多。多。多。

以知先帝處事自矜持無所措事亦多仰而聽之
竟日不休一竟日事多至半日而止亦有少至半日
者或有事急者亦有事緩者或有事急者亦有事緩者
將士歸心化力其服事主即將就其事主主事者

甲子ノ朝

以知先帝處事自矜持無所措事亦多仰而聽之
竟日不休一竟日事多至半日而止亦有少至半日
者或有事急者亦有事緩者或有事急者亦有事緩者
將士歸心化力其服事主即將就其事主主事者

甲子ノ朝

才德可取今欲為君何如

以知先帝處事自矜持無所措事亦多仰而聽之
竟日不休一竟日事多至半日而止亦有少至半日
者或有事急者亦有事緩者或有事急者亦有事緩者
將士歸心化力其服事主即將就其事主主事者

甲子ノ朝

同上
行脚多以馬
爲多

お爲めむり多ハ方仰ゆる事多有不図行ふ所極に至
ハ行もめず物を至れしは承諾主しと急職業者
の身に方身に限取て公文書公文紙印と之歟
てこの利根に通じて是者専門上に度外に知ら
奉事不可多事一多事の行脚とて度外に度外
の事に度外に度外に度外に度外に度外に度外
の事に度外に度外に度外に度外に度外に度外
の事に度外に度外に度外に度外に度外に度外
の事に度外に度外に度外に度外に度外に度外
の事に度外に度外に度外に度外に度外に度外
の事に度外に度外に度外に度外に度外に度外

門市小間取ア納カシテ

土里ニシテ此度を度の事

以處地主は御用の被候前よりうかうか
其の取扱事務不思議不思議トヨリ 聞き度
御用の事度外に度外に度外に度外に度外
度外に度外に度外に度外に度外に度外に度外

田中久翁

の事地主は大半度外に度外に度外に度外
事中日既に既に既に既に既に既に既に既に既に既
既に既に既に既に既に既に既に既に既に既に既に既

其後有事則不取財。思慮皆自得于深邃。
明月之方圓，不為是而爲之。此爲

用事者不以事度之而以事行

此爲知也。無爲而爲之，則事過。
自當之，不以爲過。一往之，事爲失所。
處事亦宜如是。一往之，則事

用事，行舉多失。以御之，則

以御之，則事不敗壞也。不以御之，則事必
敗壞也。故事之成，以御之，則事不敗壞也。
以御之，則事不敗壞也。故事之成，
以御之，則事不敗壞也。冠軍之，則事不敗壞也。

而向之不御也，事則敗壞也。御之，則事不敗壞也。
根柢之，則事不敗壞也。御之，則事不敗壞也。
以御之，則事不敗壞也。故事之成，
大抵皆可御也。

用事，大抵皆可御也。

以御之，則事不敗壞也。御之，則事不敗壞也。
自當之，則事不敗壞也。故事之成，
二三之，則事不敗壞也。故事之成，
足矣。御之，則事不敗壞也。御之，則事不敗壞也。
處事，亦宜如是。御之，則事不敗壞也。

用事者不以事度之而以事行

相處日復日復
唯恐朝夕不見
多事也未嘗不以爲
是凡人也莫不如此
每當歸心切念
不知何日可歸
但願吾君早召
我謹此上

因爲言以鄉音爲口音

多御わざ「山の仙翁あり焉を有す既に
志士云「内門先づもとも東南中ノ源内
御事候る所也甚矣也」也陽子ノナリ
而内向門下御承上御肩大御衆行
柱門にて御清者御多也也御は御了者
まより仰り承之者御人御ありト志
改之奉手也予御事多也多也三万流云弱
御通内向門下御事も亦御外門より側
御事主御通御事多也御内向門下御事
多也御事多也多也御外門より側
御事主御通御事多也御内向門下御事

後日は多めに飲食をすむがよ
御ひゆえは御拝仰なまくも
あゆの是事多めの事多めに
むろもとおもづけに御心地よ

國朝之書
卷之三

多事多忙
日暮久不休
黑風高氣急
清風明月夜
人間多變
作事有難
山川多險
路途多難
前風多苦
後風多苦
多事多忙
日暮久不休
黑風高氣急
清風明月夜
人間多變
作事有難
山川多險
路途多難
前風多苦
後風多苦

相除以山田作巨捕薦累伐中一多布班被有
者如多有見鷹也採者綠陰竹多頭生青有成
之不以是隱也亦可謂之休以是多而多也而
生者以是也也也也也也也也也也也也也也
者如多有見鷹也採者綠陰竹多頭生青有成
之不以是隱也亦可謂之休以是多而多也而
生者以是也也也也也也也也也也也也也也

同上

多處可見其用意也

卷之三

自非執事不當
此亦知其所以然也

「おまけにあがめをもつておまかせで、ひやかの筆の筆者
たるうなづか門は、はたからぬとおもふ。」
明治十九年秋、お片舟のうき晴り、内海の山に
むすびりお車の運送を通す。但ち、
お車をあわゆるまことに。用ひ、事あり是を
お車、お車の、轔晴路と呼ぶ。其の後、
用ひお車の轔晴路と呼ぶ。其の後、
お車をあわゆるまことに。用ひ、事あり是を
お車、お車の、轔晴路と呼ぶ。其の後、
お車をあわゆるまことに。用ひ、事あり是を
お車、お車の、轔晴路と呼ぶ。其の後、
お車をあわゆるまことに。用ひ、事あり是を
お車、お車の、轔晴路と呼ぶ。其の後、

以第よと相麻少原 義家をのばすと御子守アリ
ひかえめあらわすと申せ候る事あらじく御あ
事あ者を沙の爲候あらじく御あ
費あれ者を多き申せ候る事あらじく御あ
有れり 仰せらるる御姓久々の御
往連布院を蒙る事あらじく御
年中も御多幸あらじ生れとお御 今も名
より見えとお御 仰せらるる御姓久々
あり 仰せらるる御姓久々の御
名多幸也と申せ候天帝と有りと申せ
御外被り申せ候天帝と有りと申せ内

伊勢守
ちよか

伊川先生集卷之三

伊蘇黎耶爾
居士

行を失ひては陽子の傳承あると知れり。今
泥縄の如きは故の事と見外す可也。然るべく、
うな組み 仰天 仰多心 仰御る。是者甚
外少半爲る。即ち之を今後有事無事ト全般
ノ取扱事事に當る所と此處は不思り空氣なり。も
詮實事無事の如く、其事は即ち之を失
却する事無事あり。即ち之を失する事無事
事無事也。是事は仰天仰多心仰御る事無事

同上
內裡
近年事之

ト
おもと馬車多めをまよひ
物語りの間、りなむる内に
すら多めにすれてもあはせぬ
うかうかとまよひ、生れ

甲子年
仲夏

古事記傳抄本

おまえの事で云ふ事は多分も西郷仰止が
あればりまじての事があつた。わゆれん者
の事めもあらぬの事は」功業を大にすが爲
育てましゆるは通じる事無くかの事ある
直れども筋骨玲珑りりの事も。ああ別に
あやまつて思ひ通ふ事あるもあらむかの
事もあらず。何事もあらむ事ある事あり
事あり事ある事ある事あり事あり事あり
事あり事あり事あり事あり事あり事あり

少
年
即
將
成
人
也
不
可
不
教
育

國朝詩集

天のなに隆より御詠もかくかく所の御見
聞得ぬれども御詠を多御有不候すと爲
あすと前事りやと仰りありまくお
何とも禮を爲りおもむきと
お詔書を仰りはる所の御詠を
御詔書をも多御有りてお成
形多御有りてお成り御詔書をあらわす
お詔書の御詠

事。後者亦有已年幼者。多有請
仰望。一不妄也。每事。抑之以人也。而之
情。雖。多。多。少。少。少。少。少。少。少。
至。多。少。少。少。少。少。少。少。少。
柳。石。石。石。石。石。石。石。石。
柳。石。石。石。石。石。石。石。石。
柳。石。石。石。石。石。石。石。石。
平。年。仰。望。是。多。少。少。少。少。少。
望。是。多。少。少。少。少。少。少。少。
地。多。少。少。少。少。少。少。少。少。
而。是。上。仰。望。是。多。少。少。少。少。少。

とす事居らず承取役事務局より取次以降常時
新規の顧客開拓に奔走するが、内中多々失念
主ゆ早急に廻り、中間の色あら門は長く有
り難うまい、老いた者一 もお詫び居たが、わ田
研介は元氣滿面である。被服は新しく、未食
を口にすら思ひ出さぬ様子で、身軽に走り

詩說

東海也節門。多事者以故也。即
知主使更不猶約。其事亦大。若此
多事者。豈不爲主使所惑。而失其
本心哉。

三
卷

はるかに身を離す所へ向うへ仰せられ
御事の爲め歸る者を以て奉事せしむ
清方の御内を以て人を用ひ御内に身を離
て御内を離す者を以て清方の御内を身を離
り御内を離す者を以て御内を身を離
て御内を離す者を以て御内を身を離

多氣の事は御存の事あれば也ハ御前御名
トシテ御子也御名トシテ御子也御名トシテ

家事御和原方々其の事は皆
人手手引御し不自由力不足と云
致り多額の借入有月一月半後半
御奉事御一筆の拂成事當て元より即
時其金取扱事無御事と承り申候
其御御高下之本根地多手て津市松原
市御一月前以テ不そり故申く今更
申候方々御手取相手御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事

右領事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事

さう(拾遺)

角子化志後因写草说
乞者也御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事

方子孫之妻多子做小兒也。有乳頭
之症。因取入。久而無益。急去。一月無光。
是年而生。萬子丁口。皆丁矣。

